

山形県埋蔵文化財調査報告書第35集

赤石原遺跡
北　　遺跡
発掘調査報告書

1981

山形県教育委員会

あか
赤
きた
北

いし
石
はら
原

いし
遺
いし
跡

はら
遺
いし
跡

発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和52年に実施した、県営圃場整備事業・袖崎地区に係る赤石ほか2遺跡の調査成果をまとめたものであります。

山形県の大動脈である最上川の段丘上には、縄文時代の各時期にわたって遺跡が分布していますが、赤石遺跡からは今から約7000年前の縄文時代早期の人々の生活跡も発見され、先人の歴史に改めて敬意を覚えるところであります。

緊急調査を実施する埋蔵文化財包蔵地のなかで、農林事業に関係するものが年々増加しています。農業の近代化のために、圃場整備をはかり、時代の要請にこたえるという本県の重点施策から考えて、今後とも農林事業と埋蔵文化財の保存のための調整はますます重要な課題になってくると思われます。

本書が、最上川中流域の歴史を解明する上で、学術的に寄与されることを願うとともに、文化財保護普及の一環として、県民の方々に御理解・活用いただければ幸いであります。

最後に発掘調査に御協力いただいた、村山市教育委員会・県農林水産部・調査関係の多くの方々に、深甚の謝意を表します。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

- 1 本報告書は山形県教育委員会が、昭和52年度に実施した山形県営圃場整備事業袖崎地区・送水管工事に係る緊急発掘調査である。
- 2 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、村山市教育委員会及び関係諸機関の協力を得て、昭和52年9月26日から11月28日までの延41日間行なわれた。
- 3 挿図縮尺は、遺構については2分の1・3分の1とし、土器の実測図は3分の1を原則とし、拓影図はすべて3分の1とした。石器の実測図は石鎚・石匙等の小形の石器を2分の1、凹石・磨石等の大形の石器を3分の1とした。また各挿図それぞれにスケールを示し、方位については磁北に合わせた。
- 4 挿図中の記号は、SK—土壌、SP—不明のビット、SD—溝状遺構、SQ—窯跡、SX—性格不明土壌、土器についてはRPで示した。
- 5 調査体制は次の通りである。

調査員 佐藤庄一・名和達朗・阿部明彦・佐藤正俊（県教育庁文化課）
- 6 本報告書の作成は、I章、II章1節は佐藤庄一、II章2節、III章1～3節、IV章1節、V章1・2節、VI章は名和達朗、III章4節土器は佐藤正俊、III章4節石器は佐藤義信、IV章2節、V章3節は大類誠が担当し、それぞれ執筆した。

実測図作成は大類誠（土器）、佐藤義信（石器）が担当した。また石器実測について
は高橋貴恵子・黒金佳子、挿図トレースについては津留房子がそれぞれ補助した。

写真図版関係は、佐藤義信が担当した。

本書の編集は名和達朗が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

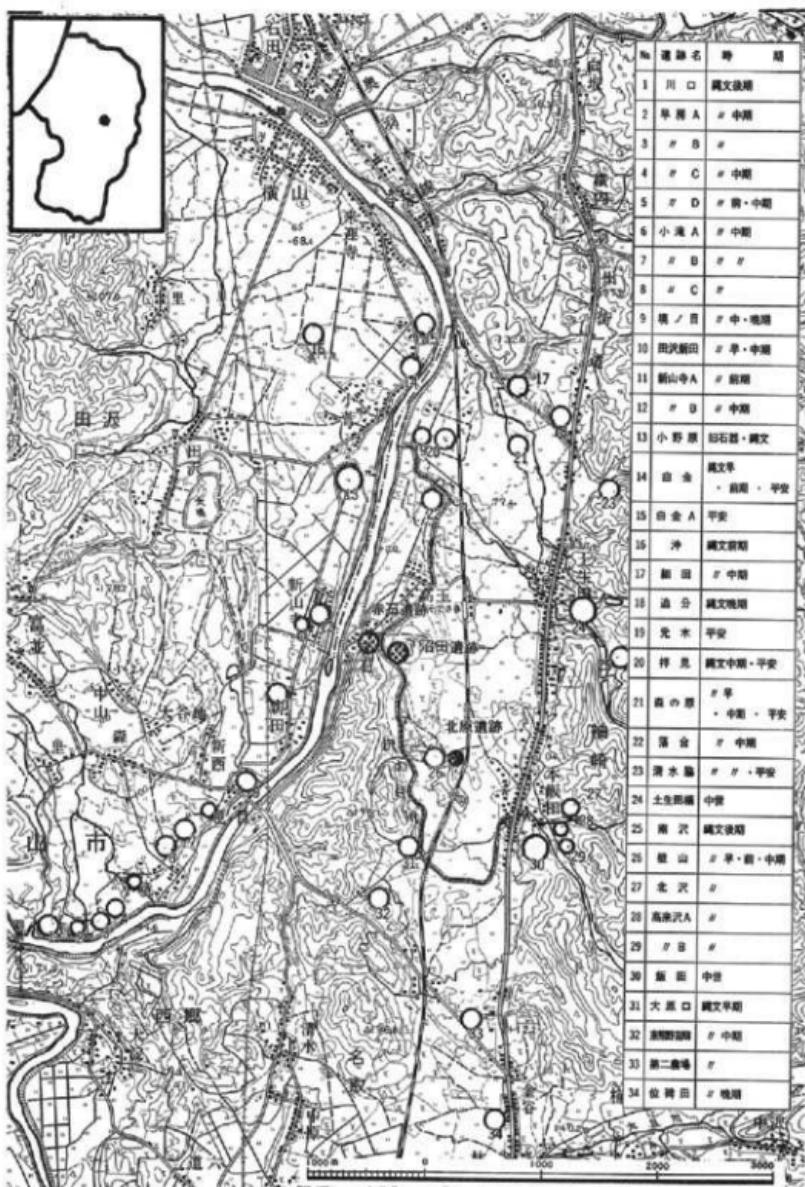
目 次

I 遺跡の立地と環境	1	第7図 86・95号土壤	7
II 調査の経緯		第8図 9・10号土壤	8
1 調査にいたるまでの経過	1	第9図 11・18・29号土壤	9
2 調査の経過	2	第10図 出土土器（1）	10
III 赤石遺跡		第11図 出土土器（2）	11
1 遺跡の層序	4	第12図 出土土器（3）	13
2 遺構・遺物の分布	4	第13図 出土石器（1）	14
3 遺構	6	第14図 出土石器（2）	15
4 遺物	10	第15図 土層図	16
IV 沼田遺跡		第16図 出土土器	17
1 遺跡の層序	16	第17図 土層図	18
2 遺物	16	第18図 遺構配置図	19
V 北原遺跡		第19図 1号窯跡・3号土壤	20
1 遺跡の層序	18	第20図 2号窯跡・4号土壤	21
2 遺構	18	第21図 出土土器・石器	22
VI 総括			
1 遺構について	23	図版1 赤石遺跡近景 調査状況 86号土壤 95号土壤	
2 遺物について	24	図版2 15号土壤 R P 2土器 17号土壤 R P 3土器 出土土器（1）	

挿図目次

第1図 位置図	
第2図 赤石遺跡全体図	2
第3図 沼田遺跡・北原遺跡全体図	3
第4図 土層図	4
第5図 遺構配置図	5
第6図 15・17・21・87・93号土壤	6

図版3 出土土器（2） 出土石器（1） 出土石器（2）	
図版4 沼田遺跡遠景 調査状況 出土土器	
図版5 北原遺跡遠景 調査状況 1号窯跡	
図版6 1号窯跡煙出し穴 2号窯跡 2号窯跡焚口 2号窯跡焚口 (内側より)	2



第1図 位置図 (尾花沢 5万分の1)

I 遺跡の立地と環境

県内を縦走する最上川は、村山盆地北部の北村山地区に入ると河島山西部より狭窄地帯を形成し、三難所である基点、隼、三ヶノ瀬を経て大石田地区にいたる。流域一帯の段丘及び丘陵上には、数多くの遺跡や連続的に分布しており、当時の生活と本河川との関係が密接であったことがうかがわれる。(第1図)

赤石遺跡は、村山市土生田字赤石にあり、最上川右岸の段丘上に立地する。以前から遺物の採集されることで知られ、県遺跡地図に644の番号で登録されている。標高80m、地目は畑、原野、水田、宅地である。沢の目川をはさんで東側には、沼田遺跡が立地する。

沼田遺跡は、村山市土生田字沼田にあり、沢の目川右岸のなだらかな丘陵上に立地する。標高85m、地目は畑である。

北原遺跡は、奥羽本線袖崎駅南方約1.3km、村山市土生田字北原にある。線路西側の舌状丘陵先端部に立地し、標高88m、地目は畑、一部原野である。以前水田の排水溝を掘るために丘陵の東南側を削り取った際、多量に繩文土器が出土したそうである。

なお、沼田・北原両遺跡は、事前の分布調査で確認された新規の遺跡である。

II 調査の経緯

1 調査にいたるまでの経過

赤石遺跡は、山形県村山市土生田字赤石に所在する。遺跡は、古くから繩文時代の土器や石器が出土することで知られており、昭和30年代に県立村山農業高校でも発掘調査を実施している。

この地域に昭和52年度から袖崎地区の県営圃場整備事業が計画されることになり、昭和51年10月に山形県教育庁文化課が分布調査をした結果、送水管設置地区に赤石遺跡のほか新たに2つの遺跡が確認された。北から各々の所在地の小字名をとって沼田遺跡、北原遺跡と呼ぶ。いづれも丘陵の先端部に立地する繩文時代の遺跡である。

県教育委員会では、試掘調査の内容を踏まえて、県農林部・村山市教育委員会・袖崎土地改良区等関係機関と協議を重ね、事前に発掘調査を行うことになった。赤石ほか2遺跡の発掘調査は、送水管設置地区に限定し、幅は10~14mにあたる。

2 調査の経過（第2・3図）

調査は、昭和52年9月26日～11月28日までの41日にわたって実施した。調査順序は、赤石・沼田・北原遺跡の順に行ない最終の記録段階では、各々の作業進行状況に応じて併行して行なった。

調査方法は、各遺跡とも 2×2 mを最小単位としたグリッドを基準とし、工事区域内に設定した。

まず、送水管工事区域のセンター杭を基準にX座標軸を設定し、これに直交してY座標軸を設定した。

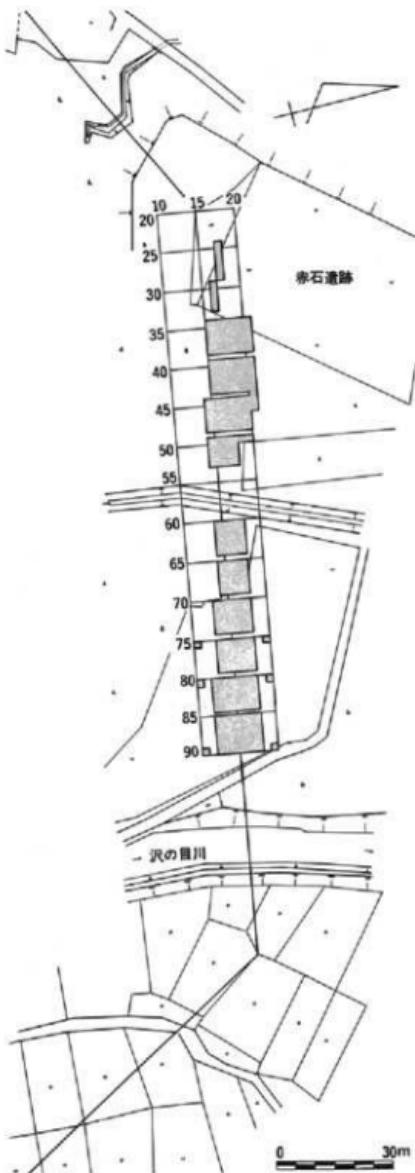
赤石遺跡は、0～90-10～21、沼田遺跡は、0～133-0～10、北原遺跡は、10～20-10～20グリッドに細分を行なった。

最初、赤石遺跡から 2×8 mのトレンチによる試掘を実施し、遺跡の範囲、遺物・遺構密集地区を追求した。その結果、調査区西側に遺物出土が顕著なことが把握され、重機による全面拡張を進めた。

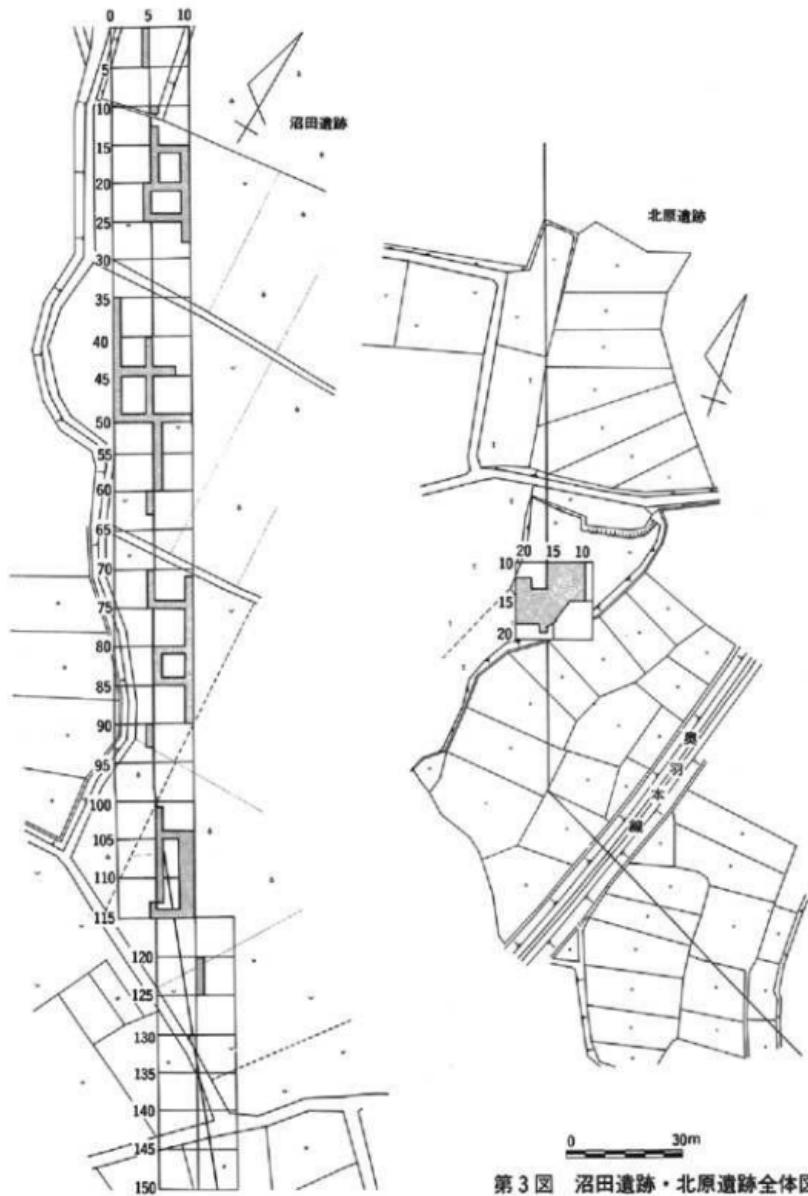
つぎに遺構・遺物確認の精査を行ない、土壤・ピット群を検出し、実測・レベルの記録、全体写真等を撮影し調査を終了した。

沼田遺跡も同様に調査を進めたが、沢の目川護岸工事により遺物包含層がほとんど削り取られており、トレンチ調査区の土層記録及び写真撮影で終了した。

北原遺跡は、調査区域が狭いためグリッド掘りによる調査を行ない、丘陵先端部の南側傾斜面より登り窓・土壤を検出し、同様に実測・レベルの記録、写真撮影を行ない全調査を終了した。



第2図 赤石遺跡全体図



第3図 沼田遺跡・北原遺跡全体図

III 赤石遺跡

1 遺跡の層序（第4図）

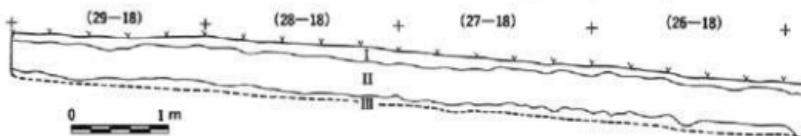
本遺跡は、西側にゆるく傾斜した段丘面上にあり、南側は丘陵とそこに西側から入り込む沢によって区切られる。そのため、地層は東側から西側及び沢が入り込む南側にかけて傾斜し、特にX軸52列より西側の調査区において明瞭である。

層序は、西側の調査区を基準に3つに分けられる。

I層 表 土 黒ボクといわれる粒子の細い黒色土で、比較的やわらかい。

II層 黒 色 土 白色の風化礫粒子をまばらに含み、下半部にかけてかたくしまっている。遺物包含層である。

III層 暗黄褐色土 砂を含み、かたくしまっている。遺構確認面である。



第4図 土層図

2 遺構・遺物の分布（第5図）

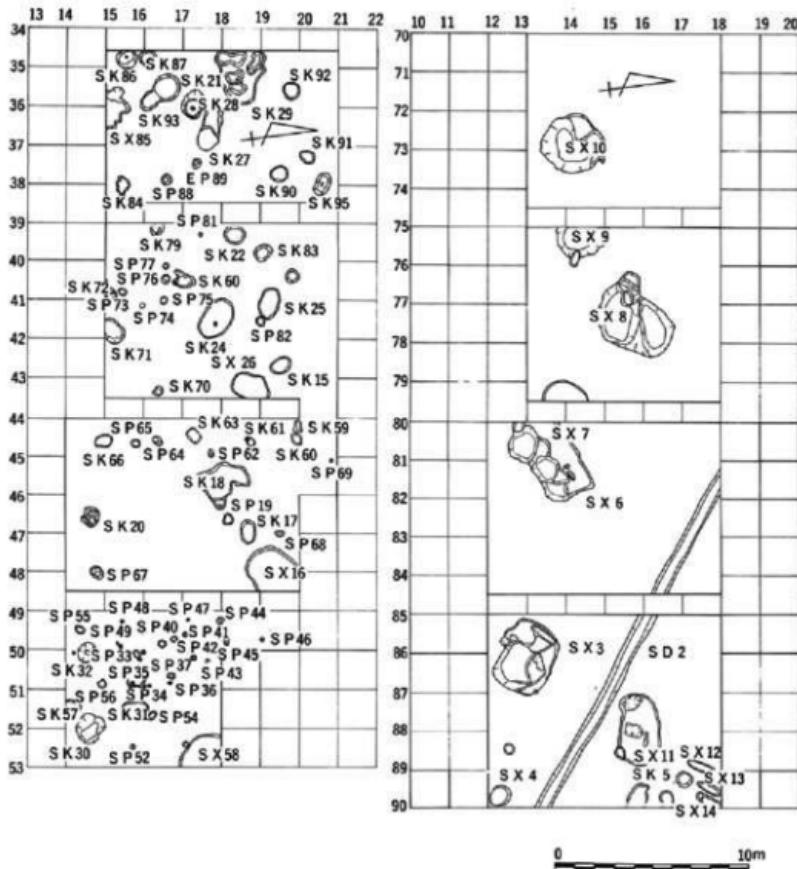
今回検出した遺構は、SK土壙44基、SPビット42基、SD溝状遺構1基、SX性格不明土壙14基である。

それらは、前三者がグリットX軸52列より西側、後二者がX軸70列より東側に分布する傾向を示す。SPは49~52-14~20に集中し、SK15・17はY軸19列付近に並ぶ。SK22・27・28・86・95・96は28~39-16~21に分布する。SD2は89-14から82-18にかけて北西方向にのびる。

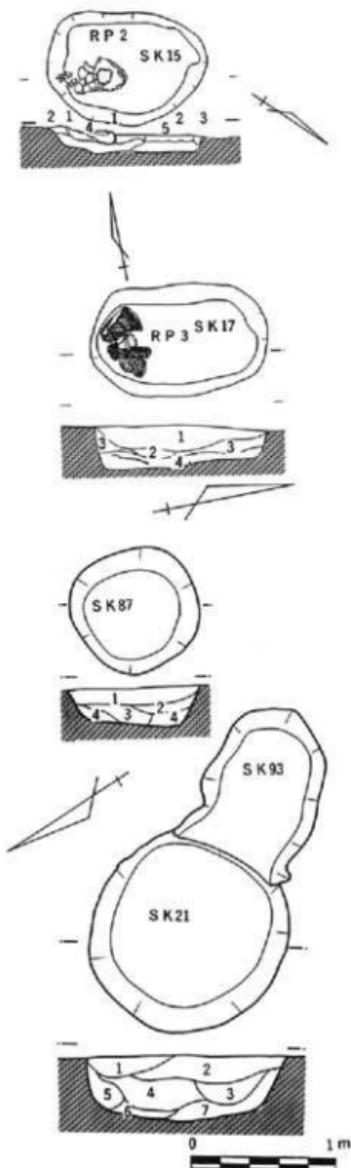
全体に検出遺構がX軸52列より西側の調査区に片寄るのは、地形的に南側の沢への傾斜変換線上に調査区が位置することに関係すると考えられる。

本遺跡出土遺物は、縄文土器、石器、須恵器に分けられる。量的には、縄文土器が主体を占め、須恵器は少量のみである。遺物は、II層の遺物包含層及び土壙覆土内より出土している。出土分布は、遺構の分布密度に一致し、X軸52列以西に集中する。東側の調査区は、SX土壙覆土内出土が大部分である。

一括土器は、SK15・17より出土のみで、他はほとんど小破片である。



第5図 遺構配置図



第6図 15・17・21・87・93号土壤

3 遺構

15号土壤 (第6図 図版2)

42-20グリッドにあり、確認面はIII層上面である。平面形は橢円形を呈し、長径110cm、短径78cm、深さ15cmを測る。長軸方向は、N-25°-Wを示す。墳底はやや凸凹を有するが殆んど平坦である。壁は南側で斜めに、北側ではほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は5層に分けられ、1層が暗黄褐色で、2~5層は黒色土である。遺物は1層よりRP2尖底土器が、傾斜した状態で出土している。同土器の内部には、偏平な石が含まれる。時期は、縄文時代早期大寺式併行とみられる。

17号土壤 (第6図 図版2)

46-19グリッドにあり、確認面はIII層上面である。遺存状態は良好である。平面形は橢円形を呈し、墳底は中央部でゆるい段を示すがほぼ平坦である。長径124cm、短径78cm、深さ28cmを測る。長軸方向は、N-95°-Eを示す。壁はほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は、4層に分けられ黒色ないし黒褐色土で構成する。4層にはRP3丸底深鉢が扇形に出土し、上には偏平な石がのっている。時期は縄文時代前期上川名II式併行とみられる。

21号土壤 (第6図)

35-17グリッドに位置し、確認面はIII層上面である。93号土壤を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、長径140cm、短径138cm、深さ45cm、長軸方向はN-35°-Wを示す。墳底は若干起伏をもつが、ほぼ平坦で

ある。覆土は、7層に分けられ、黒色ないし黒褐色の土層で、2層以外は全般にやわらかい。出土遺物は、1層より土器破片少量である。時期は縄文時代晚期大洞BC式併行である。

87号土壙（第6図）

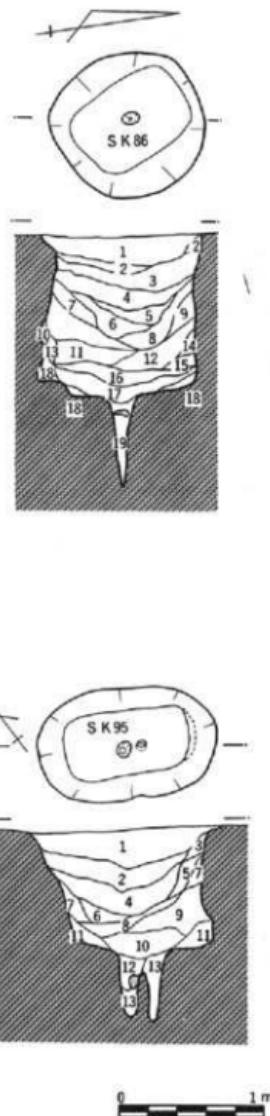
34-16グリッドにあり、確認面はIII層上面である。平面形は、ほぼ円形を示し、長径94cm、短径90cm、深さ26cmを測る。壁は斜位に掘り込み、壙底は北側に少し傾斜する。覆土は、4層に分けられバミスを少し含む黒色土で構成し、4層以外は全般にやわらかい。出土遺物はみとめられない。

86号土壙（第7図 図版1）

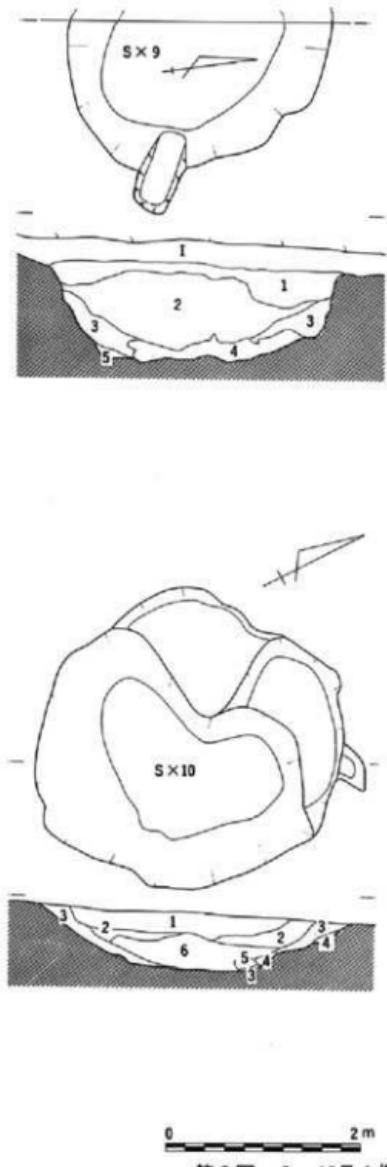
34-16グリッドにあり、確認面はIV層バミス層上面である。平面形はほぼ円形を示し、長径100cm、短径98cm、深さ120cmを測る。長軸方向は、N-27°-Wを示す。壙底平面形はやや矩形を呈し、中央部に径24cm、深さ50cmのピットを有す。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、断面形態はU字形を示す。覆土は、19層に分けられ、黒色ないし暗黄褐色土である。1層より土器破片を出土する。時期は縄文前期上川名II式併行とみられる。

95号土壙（第7図 図版1）

37-21グリッドに位置し、確認面はIII層上面である。平面形は楕円形を示し、長径124cm、短径75cm、深さ84cm、長軸方向はN-151°-Wを示す。壁は東側が壙底部でやや袋状に張り出し、西側は斜位に掘り込まれている。壙底は、ほぼ平坦で中央部に径12



第7図 86・95号土壙



cmと10cm、深さ48cmと51cmの2本のピットが在る。覆土は、13層に分けられ、黒色・暗褐色・暗灰褐色土で構成する。1層より土器破片を出土する。時期は前述の87号土壤と同様縄文前期上川名II式併行とみられる。

9号土壤 (第8図)

75—15グリッドに位置する。確認面は、III層上面である。全体は不明であるが、平面形は、不整円形を呈すると推定される。径302cm、深さ108cmを測り、主軸方向はN—10°—Wを示す。壁は凹凸を示しながらゆるやかに立ち上り、壙底は不整な凹凸を呈し、壁との境界が不明瞭である。覆土は、5層に分けられ、1・3層黒褐色土、2・4層暗黄褐色砂質土、5層暗褐色土で構成し、1と3層との間に2層がレンズ状に入り込む特徴を示す。出土遺物は、みとめられない。

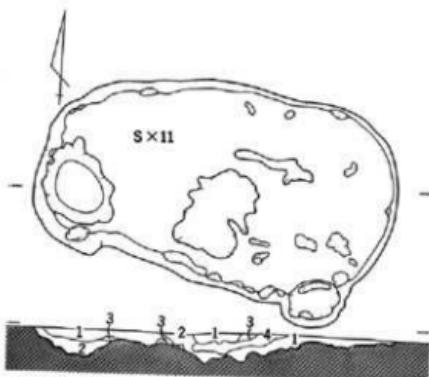
10号土壤 (第8図)

73—15グリッドにあり、確認面はIII層上面である。全体的特徴は、9号土壤に類似する。平面形は、不整円形を示し、長径320cm、短径310cm、深さ60cm、主軸方向はN—8°—Eを示す。壁は、ゆるやかに立ち上り、断面形態は皿状を呈する。壙底は三つの段をなし、境界線は不明瞭である。覆土は、6つに分けられ、1・3層黒褐色土、2・5・6層黄褐色ないし暗黄褐色砂質・砂疊土、4層暗褐色土であり、1と3層との間に2・6層がレンズ状に入り込む。出土遺物は、みとめられない。

第8図 9・10号土壤

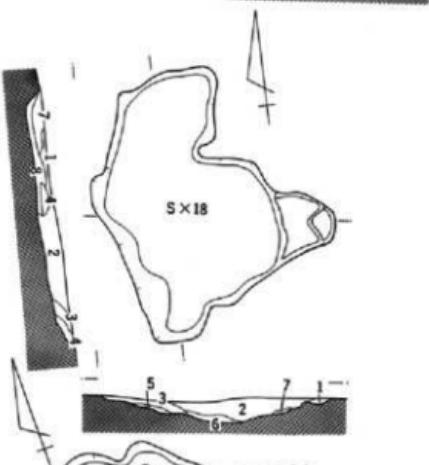
11号土壤 (第9図)

87-16グリッドに位置し、確認面はIII層上面である。平面形は、不整橢円形を示し、長径370cm、短径108cm、深さ32cm、主軸方向はN-85°-Wである。壁はゆるやかに立ち上り、壙底は不規則な凹凸を有し、皿状ないし土壤状の落ち込みをもつ。覆土は、4つに分けられ、黒褐色な黄褐色ないし暗褐色土で構成し、不規則な堆積状況を示す。1層より土器破片の出土をみるが、全般に人工による土であるかどうか疑わしい。



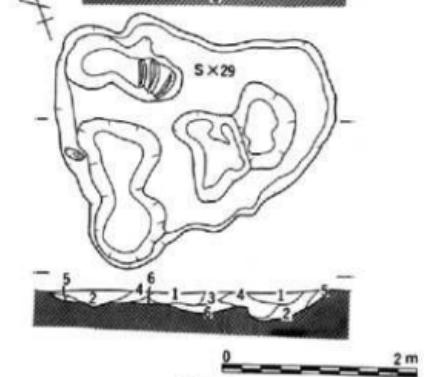
18号土壤 (第9図)

45-18グリッドに位置し、確認面はIII層上面である。平面形は、不整形をなし、長軸278cm、短軸120cm、深さ24cm、主軸方向はN-5°-Eを示す。断面形態は皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上る。壙底は、起伏を示しながら中央が少し凹をもつ。覆土は、7つに分けられ、黑色土、暗黄褐色砂質土、暗灰褐色砂質土で構成し、2層が他の層の上に厚く堆積する。出土遺物はみとめられない。



29号土壤 (第9図)

34-19グリッドに位置し、確認面はIII層上面である。不整形な平面形を示し、長軸286cm、短軸130cm、深さ22cm、主軸方向はN-94°-Eである。壁は壙底との境界が不明瞭で、皿状の断面を示し、壙底は、不整形な凹凸を呈する。覆土は、6つに分けられ、黑色土を主体に構成し、出土遺物はみとめられない。



第9図 11・18・29号土壤

4 遺物

土器

出土した土器は、整理箱に3箱を数え、包含層から多く出土している。第I群土器から第IV群土器に大別し、土器の描出された技法および文様別に類別化した。

(1) 土器片の分類 (第11・12図 図版3)

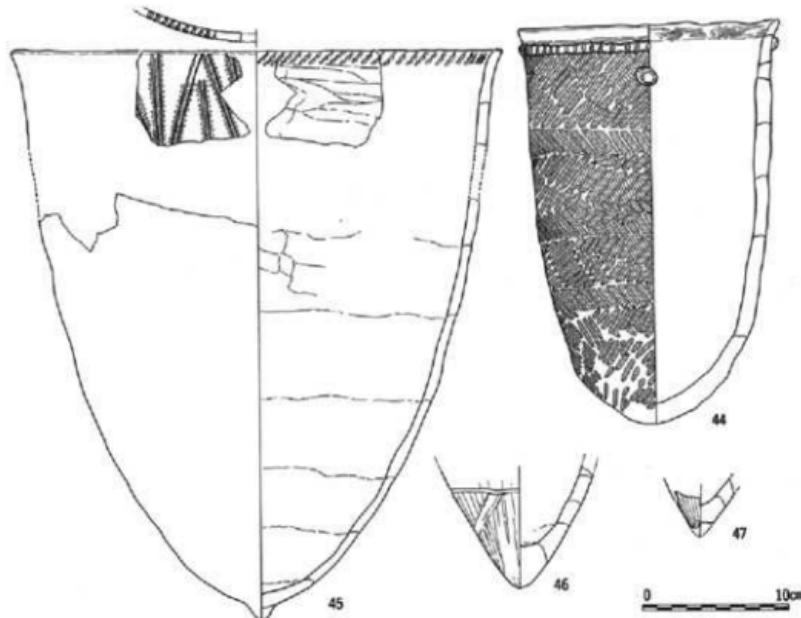
第1群土器 繩文時代早期中葉から末葉にかけての土器である。

a類 (1・6・8・9)

地文を貝殻による施文具を用いている。(1・6・9)は貝殻の腹縁を使用し、斜状または横走するように施し(6)では連続する爪形状になっている。(8)は貝殻の先端を用いて斜位状に圧痕し、地文が貝殻腹縁によって施文されている。

b類 (7・10)

棒状工具により平行沈線によって文様が描出されている。(7)は横走する数条の平行な沈線で、爪形による施文がみられる。(10)は地文が繩文で、不規則的な沈線となっている。



第10図 出土土器 (1)

第II群土器 繩文時代前期初頭から後葉にかけての土器である。

a類 (11~19)

器面全体に繩文を施し、羽状繩文となっている。(11)は口唇部に棒状工具で押し付けている。繩文は深く施され、多条繩文である。色調は暗褐色である。

b類 (22・26)

地文が繩文となっている。半截竹管により平行な沈線で波状や格子目状の文様を描出している。(22)は口縁が波状を示す深鉢形で、II文様帯に文様構成を集約し、頸部に二つの円形浮文を施している。

c類 (23~25)

細い粘土紐を貼付し刻目を施し、曲線や直線を描出している。

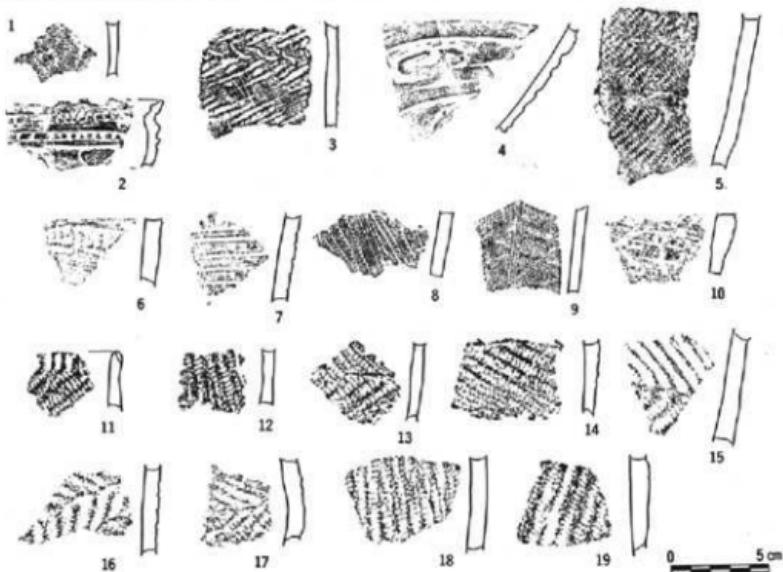
d類 (27・28)

地文を単節・無節繩文を施し、羽状になっている。

第III群土器 繩文時代中期中葉の土器である。

a類 (29~32)

地文が繩文となり、沈線によって渦巻文様を描出している。(29)は波状を呈する器形で、S字状文が簡略化され、(32)では三本の沈線でI・II文様帯を区画している。



第11図 出土土器 (2)1・SK3出土 2・SK21出土 3・SK3 4・5・SK92 6~19・包含層出土

b類(33・34)

隆線でもって渦巻文様を描出している。

第IV群土器 繩文時代後・晚期の土器を一括した。

a類(35) 磨消繩文を示す土器で、直線な文様を描出している。

b類(2・4・36・37)

刻目・羊齒繩文を描出して、鉢形・皿形土器を呈する土器である。

c類(3・5・38~43)

粗製深鉢形土器の一群で、器面全体に繩文を施し、羽状を示すものもある。

(2) 完形土器 (第10図 図版2)

(44) やや小形の深鉢形土器を呈する。器形は口縁部がやや外反し、胴下半部でややふくらみ、底部は丸底になっている。器高27.5cm・口縁部径18cm・胴部最大径16.6cmで、器厚は0.5~1.5cmを測る。胎土には、石英粒・砂粒の中粒が多量に含まれ、纖維も混入されている。胎土焼成は良くない。

口唇下1cmの部分に粘土を紐状に貼り付け、ヘラ状工具の先端を利用して押しつけている。口唇下は研磨、調整を施している。器面全体に繩文を施し、施文方法は3~4本の多条文の原体を利用し、胴上部からL R・R L・L R・R Lと交互に施し、羽状繩文となってしまっており、底辺部付近ではL R・R Lの原体を不規則に配している。粘土紐が貼付されている部分はループ文になっている。第II群a類のグループである。

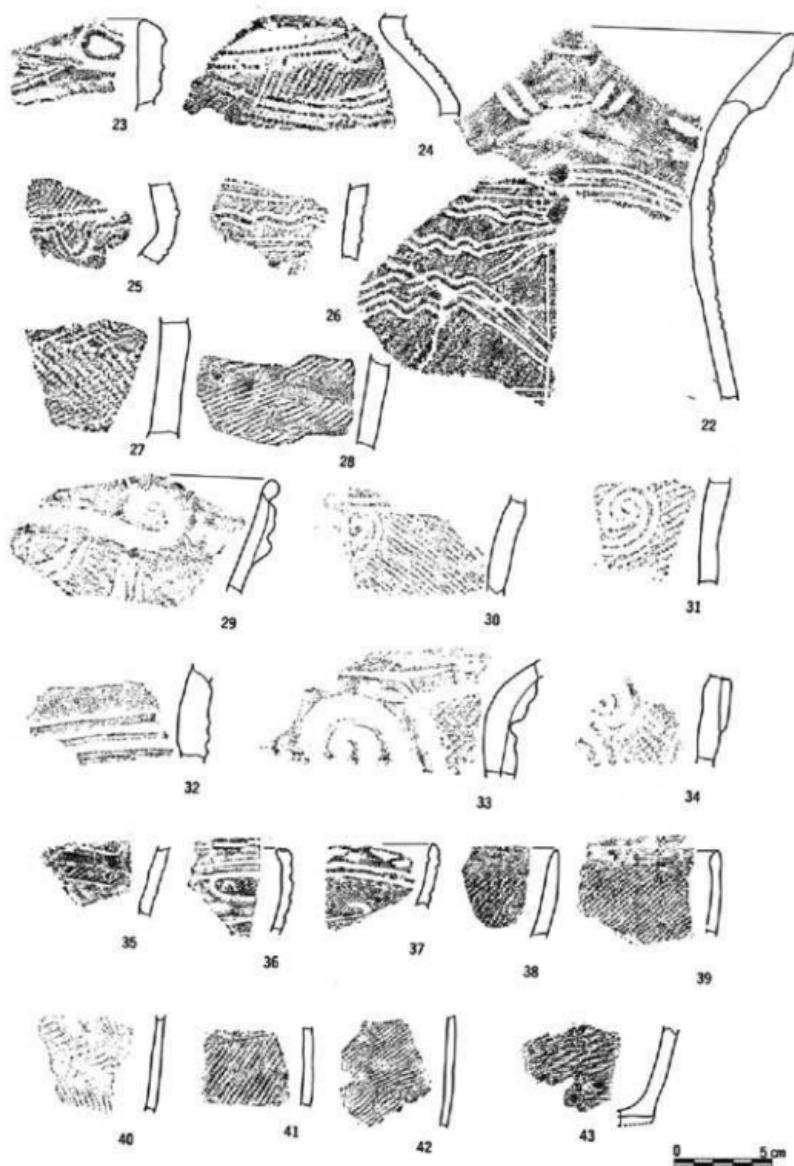
(45) 大形の深鉢形土器を呈し、器形は口唇部がやや外反し最大径を有し、底部には若干の乳房状の突起がみられる。器高39cm・最大径34cm・器厚0.5~1cmである。

文様は、口唇部と口唇裏側に貝殻の先端を利用し圧痕を施している。口唇直下よりヘラ状工具の先端で2本の細い沈線で縦・斜走し、沈線の上を貝殻の先端で圧痕しており、胴上半に文様を構成している。胴中半から底部にかけては無文で、良く調整している。

胎土は、若干の石英粒が含まれ、焼成もよく固くしまっている。

第I群a類のグループに属する。

(46・47) 底部のみで、器形は鉢形土器を呈するとみられる。胎土焼成もよく固い土器である。(46)は横走する沈線が施され、底部が丸味をもち、器厚1~3cmであり、地文は無文でよく調整されている。(47)は地文が無文で、底部は(46)に比較して直線的で鋭角的な角度を示す。



第12図 出土土器（3） 包含層出土

石 器 (第13・14図 図版3)

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約2箱であり、器種は石鎌・石匙・搔器・削器・範状石器・磨石・凹石・石錐等である。打製石器の石質はそのほとんどが頁岩で若干チャート・鉄石英がみられ、磨製石器では、砂岩・安山岩・砾岩である。なお、本項の石器を注記するにあたり、左側をa面、右側をb面とする。

石 鎌 (第13図1 図版3)

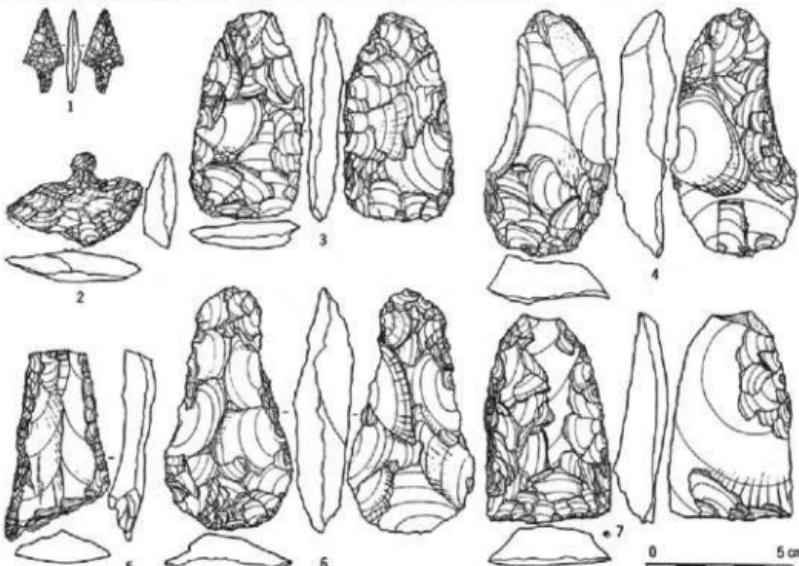
鉄石英片を素材とした有茎石鎌であり、長さ2.8cm・幅1.4cm・厚さ4.5mmを計る。茎部が全長の約1/6を占め、太く厚みがある。両側刃の剥離方向は左回りである。

石 匙 (第13図2 図版3)

頁岩の横長剥片を素材とした横長の石匙で2点出土している。(2)は現存形で長さ3.2cm・幅4.7cm・厚さ1.1cmである。a面では器中心部にまで達する荒く大きな剥離痕と、形を整えるためと刃部作出のための細かい剥離痕が認められることから、二段階の製作工程があったと考えられる。素材に厚味があるため刃部の角度は大きい。

削 器 (第13図5 図版3)

頁岩の縱長剥片を素材としたものが2点出土している。(5)は長さ6.4cm・幅3.6cm・厚さ1.2cmで、縱長剥片の両側刃にリタッチを施し刃部を作出している。



第13図 出土石器 (1)

管状石器（第13図 3・4・6・7 図版3）

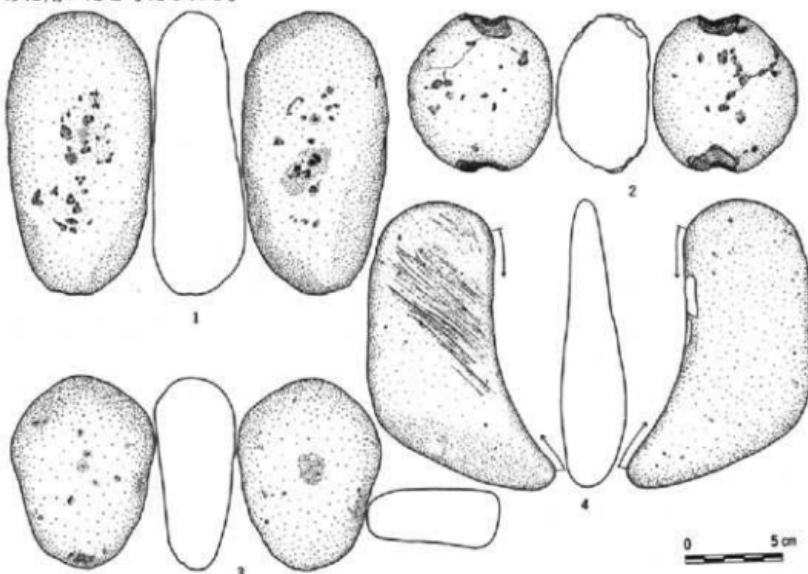
(3)は頁岩を素材とし、長さ7.1cm、幅3.8cm・厚さ1.1cmで、a・b両面に荒く大きな剥離痕が認められる。(4)は頁岩の縦長剝片を素材とし、長さ8.4cm・幅2.1cmを呈す。a面には第1次剥離痕を残し、b面に於てはバルブを刃部に起用している。(6)は長さ8.3cm・幅4.3cm・厚さ2.1cmでa・b両面に荒く大きな剥離痕が認められる。石質は硅岩である。(7)は横長の剝片を素材とし、長さ7.1cm・幅4.2cm・厚さ1.9cmである。主要剥離面のフラットな面を刃部に用い、剥離のほとんどは主要剥離面から背に向けてである。

凹石（第14図 1・3 図版3）

本遺跡からは18点出土しており、打製石器に比べると数が多く、大きく凹部の浅いものと深いものに分けられる。前者はそのほとんどが磨石を転用したもので、小型の偏平な自然礫を用いている。

石錘・砥石（第14図 3・4 図版3）

(3)は両端を両面より敲打し糸懸け部を作出している。両面が磨られていることから、磨石を転用したものと考えられる。(4)は偏平な自然礫を用い、両面と側面の一部に研摩がみられ、さらにa面には細い溝状の沈線が規則的に認められる。先端を鋭く研ぎあげるのに用いたと考えられる。



第14図 出土石器（2）

IV 沼田遺跡

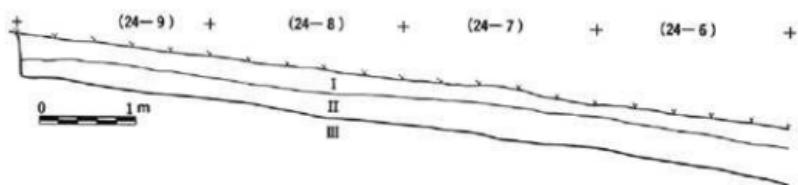
1 遺跡の層序（第15図）

本遺跡は、起伏に富んだ丘陵上に立地するため、尾根から鞍部にかけて厚く堆積する状況を示す。以前の沢の目川護岸工事で土が削り取られ、さらに耕作による整地も進み、高まりの地点は大部削平されている。層序は、24-6～9を基準に3つに分けられる。

I層 暗灰褐色土 耕作土、やわらかくサラサラする。

II層 黒色土 白色の風化礫粒子をまばらに含む。黒ボク状の細い土である。

III層 明黄褐色砂砾 地山をなし、バミスを含む。



第15図 土層図

2 遺物

土器（第16図1～21 図版4）

出土した土器は整理箱にして、約1箱分である。第I群土器から第III群土器の3群に大別して略述していく。いずれも破片のみで完形土器は得られなかった。

第I群土器（同上図1～6） 繩文時代前期前葉の土器を一括した。すべての破片の胎土に、多少にかかわらず植物纖維を含有するが、緻密である。色調は赤褐色と黒褐色を呈するものが多い。焼成は良い方である。文様はRL単節横位押捺によるループ文(1・2)。LR単節斜繩文で結節を有するもの(4)、LR単節とRL単節を横位に交互に押捺した羽状繩文(6)や、同じ羽状繩文でも(4)のようにLR単節とR無節を組み合せたものがみられる。(5)は撚糸文と考えられ、胎土は緻密で植物纖維を含む。色調は暗褐色を呈し、風化が著しい。

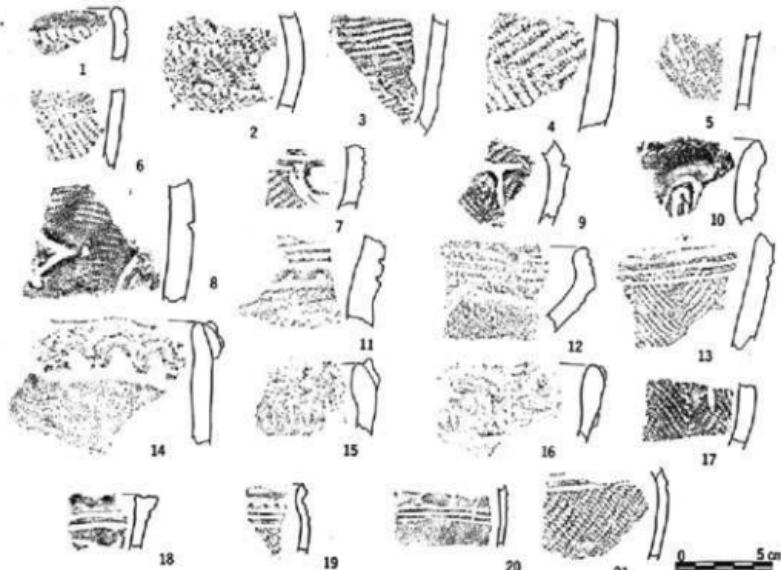
第II群土器（同上図7～17） 繩文時代中期前葉の土器を一括した。当遺跡で最も多く得られた資料である。器形は深鉢形を呈するものと考えられるが、小破片のために詳細は不明である。文様構成から2分類できる。

a類（7～9・17） 沈線文を主体として構成されていると考えられるものである。い

すれも L R 単節斜縄文を地文にもち、割合に深目の沈線が施される。(8)は沈線とともに刺突文がみられる例である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は灰褐色を呈するものが多い。(17)は縦位に結束のある羽状縄文が施文され、沈線がみられる。

b類(10~16) 粘土貼付文・撚糸圧痕文等を主体として文様構成をもつものである。器形は深鉢形(14~16)と、浅鉢形(12)を呈するものとがみられる。各破片に認められる撚糸圧痕はL Rの左撚りのものが多用されている。(10)にみられるようにR Lの右撚りも少数みられる。口縁部に波状に粘土紐を貼付し、その上に撚糸圧痕を有する例(14)、肥厚した口縁部に粘土紐を貼付し、その上に撚糸圧痕文を施し、さらにその直下に、縦位に押圧した撚糸を、横位に巡らす例(15~16)、沈線に沿って撚糸圧痕文を施す例(13)などが認められる。胎土は全般的に荒い砂粒を含むが、焼成は良好である。色調は灰褐色を呈するものが多い。

第III群土器(同上図18~21) 縄文時代晩期の土器を一括した。胎土は全般的に堅緻である。色調は黒褐色を呈するものが多い。(18)は浅鉢形を呈し、(19~21)は鉢形を呈すると考えられる。(19~21)の外面には炭化物の付着が著しくみとめられる。地文にL R 単節斜縄文が横位に施文されている。

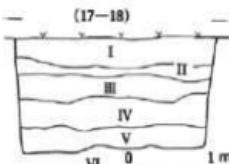


第16図 出土土器

V 北原遺跡

1 遺跡の層序（第17図）

本遺跡は、舌状丘陵の先端部に位置し、主としてその南西ないし南斜面に遺構・遺物を分布する。地層は、丘陵の最頂部から麓にかけて堆積し、高い方で地表面から発掘面まで10cm、低い方で120cmの深さを測る。そのため層序は、厚く堆積している17-18を基準にし、6つに分けられる。



第17図 土層図

I層 明褐色土 微砂質の表土層。

II層 暗褐色土 粘質で比較的均質な土層である。遺物を少量含む。

III層 暗褐色土 木炭・明黄褐色粘土・焼土が混じり、ボソボソしてしまりなし。

IV層 黒色土 微砂質でやわらかい。遺物を含む。

V層 暗赤褐色土 焼土・木炭・VI層の粘土との混土層。

VI層 明黄褐色粘質土 地山をなし、遺構確認面である。

2 遺構

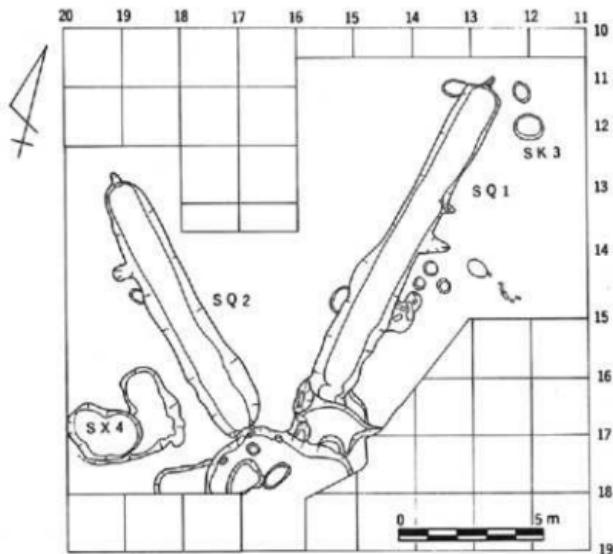
本遺跡の検出遺構は、SQ1・SQ2窯跡、SK3・SX4土壙、その他不明土壙・ピットである。いずれもVI層上面の面整理過程の検出である。

1号窯跡（第19図 図版5・6）

16-17-13-10グリッドに位置し、側壁がほぼ平行にのびる無階無段半地下式の登り窯である。窯体の中央部において床面が傾斜変換しており、それを境に燃焼部と焼成部に区分した。全長12.55m、床面幅1m、壁高は、焚口60cm、燃焼部80cm、焼成部60cmを測る。壁面は、若干内彌気味に立ち上る。床面はほぼ平坦で、焼きしまり多量の木炭片がのっている。焚口から燃焼部への傾斜角度は11°、燃成部は6°を示す。主軸方向は、N-14°-Eである。煙出しは、窯尻と側壁中央部東側にあり、扁平な石を積み重ねて構築し、その間をスサ入り粘土で埋めている。灰原は2号窯跡と連続している。覆土は、21層に分けられ、全般に多量の木炭・焼土粒子を含む。特に床面上において顕著である。出土遺物は、灰原より須恵器の小破片1点のみである。

2号窯跡（第20図 図版5・6）

16-16-20-12グリッドに位置し、1号窯跡同様無階無段半地下式の登り窯である。床



第18図 遺構配置図

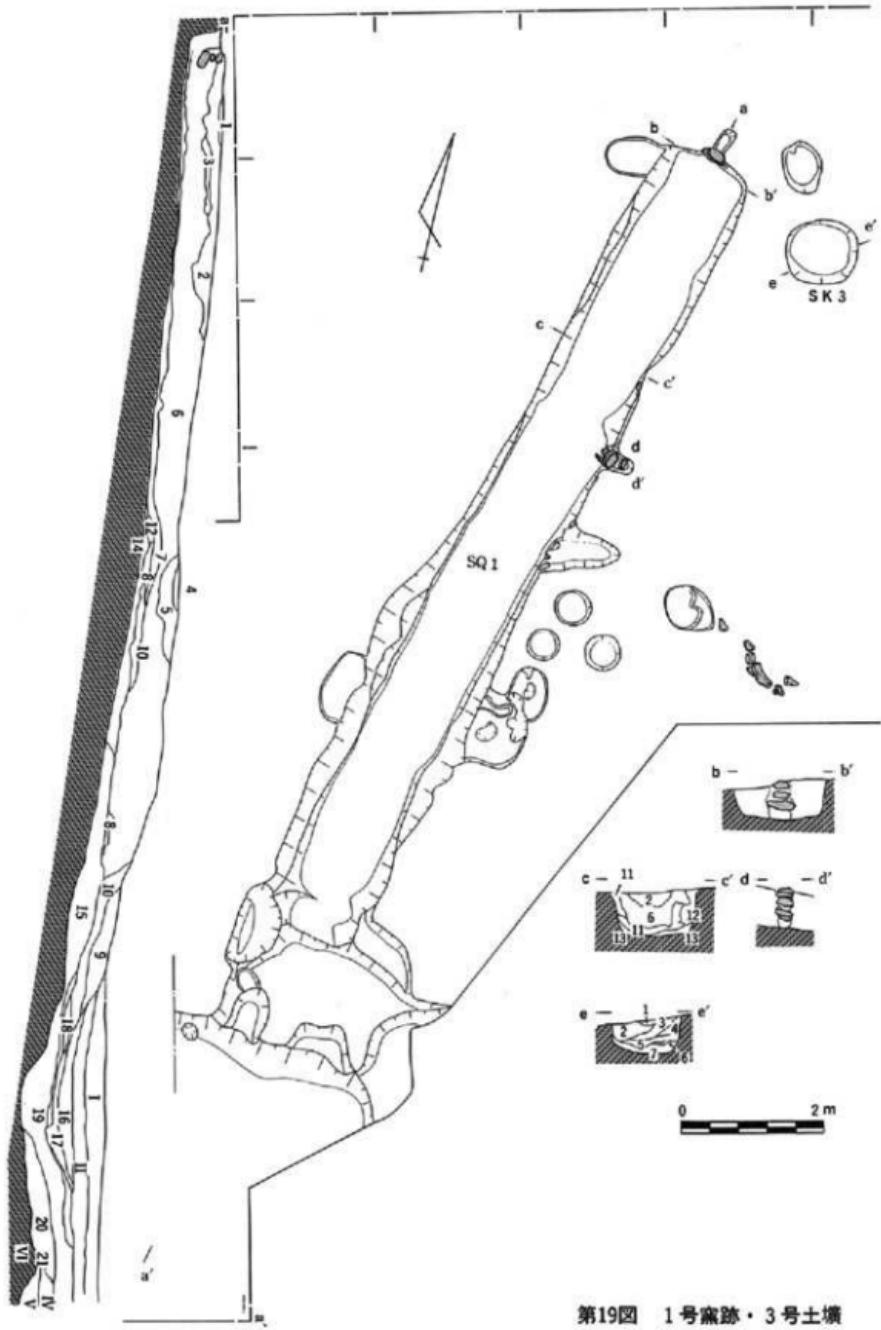
面は平坦であるが、窯尻に向って若干弓なりに反っている。焚口からの傾斜角度は燃焼部が 10° 、焼成部は逆に下に 2° を示す。全長10.1m、床面幅1~1.1m、主軸方向はN- 51° -Wである。壁高は、焚口1m、燃焼部90cm、焼成部70cmを測り、少し彎曲して立ち上る。焚口は河原石を立て、その上に同様の石をのせて天井としている。石の間は、スサ入り粘土で固めている。煙出しが窯尻にあり、偏平な石を積み重ね、同様にスサ入り粘土で固定している。煙出し穴の両脇は、焼きしまっている。覆土は、17層に分けられ全般に多量の木炭・焼土粒子を含む。出土遺物は、みとめられない。

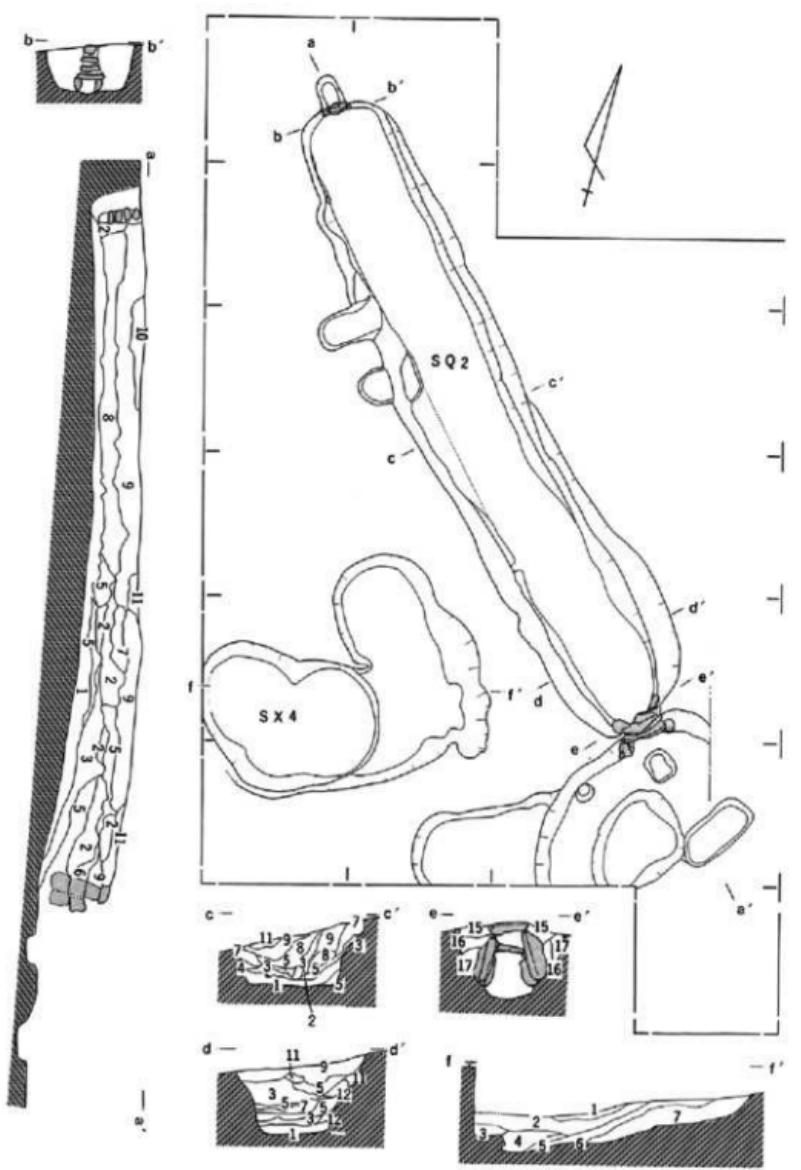
3号土壤（第19図）

13-12グリッドに位置し、平面形は円形を示し、径94cm、深さ54cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壇底は若干皿状を呈する。覆土は7層に分けられ、暗褐色及び明褐色土で構成する。出土遺物は、みとめられない。

4号土壤（第20図）

20-17グリッドに位置し、平面形は不整形を呈する。長軸4m、短軸3m、主軸方向はN- 75° -Eを示す。壇底は、西側に傾斜し起伏をもつ。覆土は7層に分けられ、1層に木炭・焼土粒子を含む以外は、暗褐色土及び黒色土である。出土遺物は、みとめられない。





第20図 2号窓跡・4号土壤

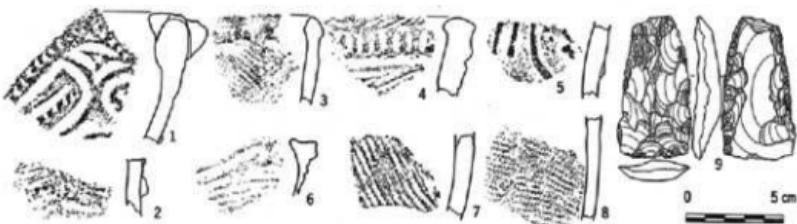
3 遺物

土 器 (第21図1～8 図版6)

出土した土器は縄文時代中期のもので、破片ばかりである。少數得られたにすぎない。(1～4)は大木7 b式に比定される。(1)は口縁部破片で4つの波状をもつ深鉢形土器と考えられる。文様は隆起線と沈線によって構成され、隆起線上に「C」字状の刻目を施している。胎土に石英砂等を多く含む。(2)は縦及び横位に細目の隆起線が巡らされ、隆起線に沿って、LR縄文の圧痕が施されている。(3)は浅鉢形土器の口縁部破片と考えられ、地文にRL単節斜縄文が施文され、口縁部にLR縄文の圧痕がみられる。器厚は4mm前後である。(4)は波状口縁をもつ深鉢形土器の口縁部と考えられ、拓影図は波状底部にあたると思われる。肥厚した口縁部にLR縄文の圧痕が施文されている。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。(5)は深鉢形土器の胴部破片と考えられ、地文にLR単節斜縄文が施文されており、その上に粘土紐が貼付されている。(6)は小形のキャリバー形土器の口縁部破片と考えられ、口縁部に「S」字状になると思われる沈線が巡る。色調は黄褐色を呈し、胎土は堅緻である。焼成は良好である。(5・6)は大木8 b式に比定されると考えられる。(7・8)は胴部破片で、(7)はRL単節斜縄文を横位に、(8)はLR単節斜縄文を縦位に回転している。色調は2片とも赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

石 器 (第21図9 図版6)

硬質頁岩使用の笠状石器である。長さ7.3cm、厚さ1.0cm、最大幅3.8cmを測る。横長の剥片素材として、背面側の両側縁を加工したのち、主要剝離面側を調整している。主要剝離面側の刃部付近に光沢を観察することができ、使用痕と考えられる。



第21図 出土土器・石器

VI 総 括

山形県営大規模圃場整備事業・袖崎地区・送水管工事に伴ない、破壊される恐れのある3遺跡について緊急発掘調査を実施した。調査期間は、昭和52年9月26日～11月28日の41日間である。調査区域は、送水管路線内に限定して行ない。発掘面積は赤石遺跡1012m²、沼田遺跡728m²、北原遺跡217m²である。その結果、赤石遺跡では土壌群、縄文時代早・前期の一括土器、北原遺跡では2基の登り窓跡を検出し得た。沼田遺跡では遺物包含層がかなり削平されており、少量の遺物のみで明確な遺構は得られなかった。

以下、調査の成果をまとめ総括とする。

1 遺構について

赤石遺跡の土壌群では、その形態・覆土の違いにより、5つに類別される。

1類 平面形は梢円形を示し、長径1m前後、短径80cm前後、深さ30cm前後、覆土ないし

墳底上部に一括土器を1個含み、その内部あるいは上部に石をのせるもの。(S K15-17)

2類 平面形は円形を示し、径1m前後、深さ30cm前後、墳底が平坦で、斜位ないしほぼ垂直に壁を掘り込むもの。(S K21・23・87・98・101)

3類 平面形は円形ないし梢円形を示し、径1m前後、深さ1m前後断面U字形を呈し、墳底に深さ50cm前後の小ピットを有するもの。(S K22・27・28・86・95・96)

4a類 平面形は梢円ないし不整形を示し、径2～3m、深さ50cm～1m、墳底と壁面との境界が不明瞭で、黒色土ないし暗褐色の間に、地山の土をレンズ状に堆積するもの。
(S X 8・9・10)

4b類 平面形は4a類に類似するが、深さ30cm前後と浅く、不規則な覆土堆積を示すもの。
(S X 3・6・7・11・18・29)

1類は、出土遺物の時期からみて、縄文時代早期大寺式(S K15)、同じく前期上川名II式(S K17)に併行する。

2類は、県内では中山遺跡S K5(註1)に類例がみられる。遺物を含むものは少ないが、縄文時代晚期大洞B C式併行の土器片を出土する(S K21)。

3類は、古道・中山(註1)・小林A(註2)遺跡に類例がある。形態的特徴から落とし穴として把握される。時期は、出土遺物の検討から縄文時代前期花積下層式に併行する。

4a類は、久伝遺跡S K2(註1)に類例があり、覆土の状態により風倒木の感がする。

4b類は、不整形な凹凸を示す壇底や、不規則な覆土の状態からみて人工によるものではなく、4a類に類似した自然の營力によるものと判断したい。

北原遺跡の窯跡は、全体に須恵器窯跡に類似する。説明にあたっては、須恵器窯跡の形態に基づいた。

性格については、SQ1灰原より須恵器小片が1点出土したのみで、両窯とも出土遺物をみとめられず、又窯体の検討を行なったところ、須恵器窯跡とは似て非なるものであると推定される。速断はできないが、床面より多量の木炭片が出土し、覆土内にも多量の木炭及び焼土粒子を含んでいることから、炭窯としての性格が推定される。

時期については出土遺物がなく不明であるが、現在の炭窯の形態は古くとも明治時代以後のものであり、少なくともそれ以前の時期のものとして把握されよう。しかも形態が須恵器窯跡に類似しており、今後の類例を俟ちたい。

2 遺物について

土器 今回の調査では、各遺跡ともほとんどが小破片であり、しかも量的には少ない。

赤石遺跡第I群a類は大寺式（田戸式）、第II群a類は上川名II式（花積下層式）、同b類は大木4式、同c類は大木6式、第III群a類は大木8b式、同b類は大木9a式、第IV群a類は宮戸IIIa式、同b類は大洞BC及びC₁式期にそれぞれ併行する。沼田遺跡第I群は大木1式、第II群1類・2類は大木7b式、第III群は大洞C₁式期に併行する。北原遺跡は、出土数が少なく類別化を行なわなかったが、大木7b・8b式期併行にまとめられる。

石器 今回の調査では、全般に出土数が少ない。比較的赤石遺跡において若干多くの出土がみられた以外、他の2遺跡では散発的な出土数である。従って明確な石器組成を得たとはいえないが、赤石遺跡の石器を基準にみた場合、次のようにまとめられる。

器種は、石鎌・石匙・搔器・削器・箆状石器・磨石・凹石・石錘・砥石である。量的には、凹石が18点と一番多い。打製石器では、箆状石器が多く出土している。時期別の類型は不明確であるが、石鎌・石匙は縄文時代晩期の形態的特徴を示す。この類例としては、玉川遺跡C地点出土石鎌b類・石匙（註3）がある。また箆状石器の中で横長剝片を素材としたものは、縄文時代前期前半の所産と考えられる。

石材は、打製石器では頁岩を主体にチャート（角岩）・鉄石英が若干みられ、磨製石器では砂岩・安山岩・礫岩が用いられている。

（註1） 山形県教育委員会「古道・中山遺跡他発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第9集 昭和52年

（註2） “” 「小林遺跡”」 第8集 昭和51年

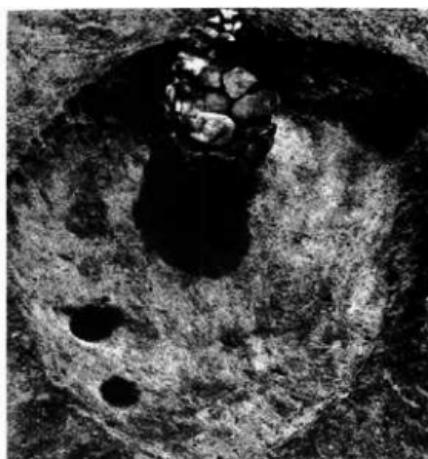
（註3） 致道博物館「玉川遺跡資料編Ⅰ」致道博物館考古学叢刊第2冊 昭和48年

図 版



図版 1

赤石遺跡近景
調査状況
95号土塁 95号土塁



图版 2

15号土壤 R P 2土器

17号土壤 R P 3土器

出土土器 (1)

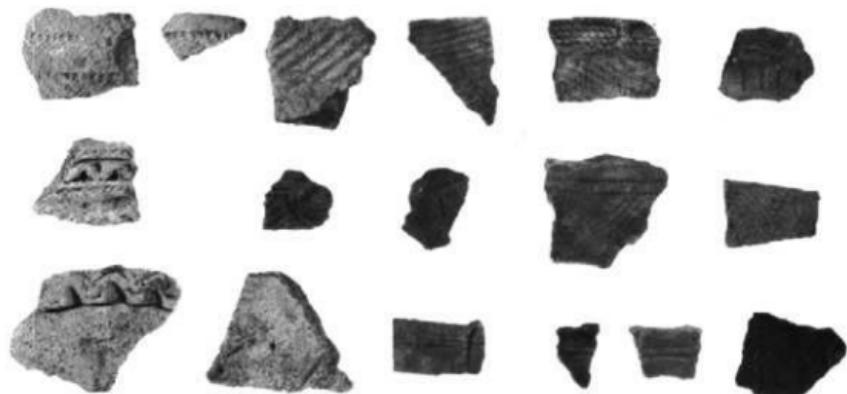


図版 3

出土土器 (2)

出土石器 (1)

出土石器 (2)

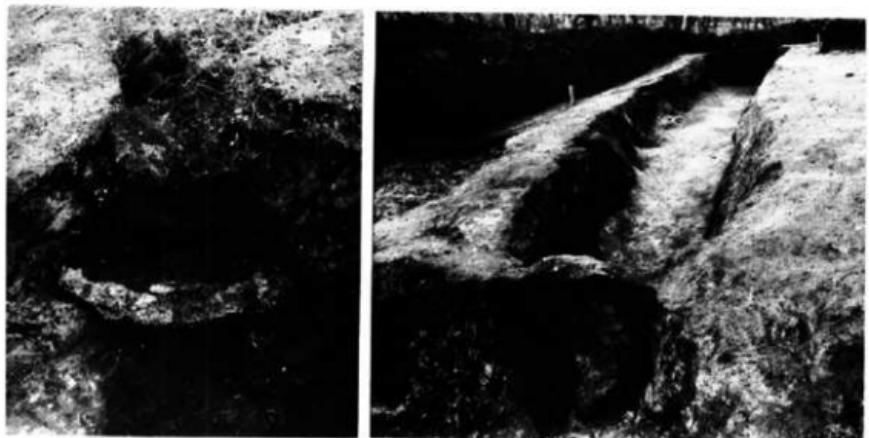


圖版 4

沼田遺跡遺量
調查狀況
出土土器



圖版 5 北原遺跡遠景調查狀況
1号窯跡



図版 6

1号窓跡掘出し穴 2号窓跡
2号窓跡焚口 2号窓跡焚口(内側より)
出土土器・石器

山形県埋蔵文化財調査報告書第35集

あか いし きた はら
赤石・北原遺跡
発掘調査報告書

昭和56年3月30日 印刷
昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 株 大 風 印 刷
